

2 . やさしい育成技術

子馬の管理方法 ~ 初期育成調教の方法 その3 ~

日本中央競馬会 日高育成牧場 専門役 頃末 憲治

今号では、JRA 日高育成牧場で実施している初期育成調教段階における騎乗調教の方法について解説していますので、ご一読いただければ幸いです。

騎乗調教

1 . 育成馬への騎乗

1) 騎乗について

調教鞍は強固な鞍骨が入っていないため、腹帯が緩いと変位しやすいので、騎乗する前には確実に腹帯を締める必要があります。また、育成馬では馬に人が乗るといふ馴致ができていないことから、騎乗に当たっては必ず補助者に足を挙げてもらい、馬上で座る際にもできるだけ静かに鞍に尻を下ろすようにします。

2) アブミ(鐙) について

アブミ革の長さは求められる歩法および騎乗スピードに応じて調節しなければなりません。また、アブミを履いた状態で長さを調節できるように訓練する必要があります。調教が終了して下馬するまでは安全のためアブミを脱がないようにします。

3) 手綱について

騎乗調教の初期段階の馬はフラフラしたり、突然突進したりすることも多く、このような状態を制御あるいは誘導するために、手綱をダブルブリッジにして保持します(図1)。また、ダブルブリッジにした手綱とネックストラップを併せて持った拳をキ甲の左右に静定することによって、ハミ受けを安定させるとともに、突発的な馬の動きに対して手綱の引っ張り過ぎを防止できます。左右の手綱を個別に持った場合は、突然の動きに両手の間隔が開き、バランスを失って落馬事故につながります。

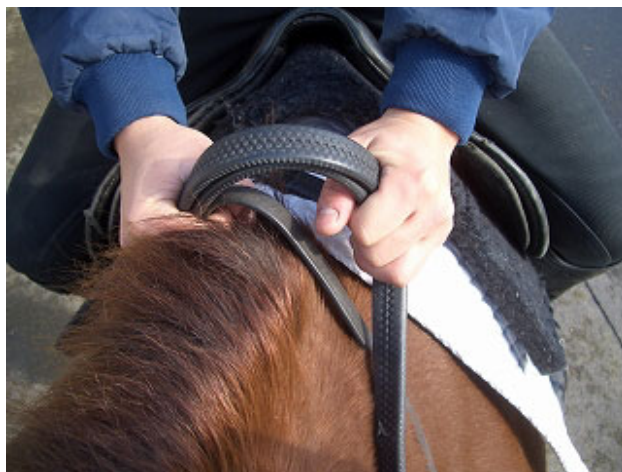
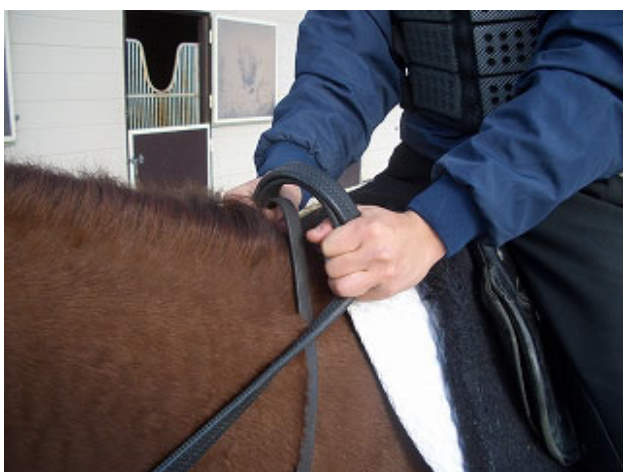


図1 ダブルブリッジによる手綱の持ち方

2. 調教時の隊列の考え方

競馬での走行を意識して、より単純かつ明確な目的意識を持った調教を実施するため、隊列を組んだ調教を行います。この際、調教段階や馬の状態を良く把握し、騎乗時の隊列や位置を配慮しなければなりません。馬の性格や個性に合わせて位置取りなどをアレンジしますが、強制ではなく馬が自主的に運動内容や強度を消化できる組み立てが必要です。したがって、騎乗者は何を目的とする隊列あるいは位置取りであるのかを理解して騎乗することが重要です。

牝馬は区分して調教することが望まれます。牝馬のいわゆる「馬気」は競走に悪影響を与えるために、なるべく発現させない管理が必要です。そのために、調教群に牝馬が混在している場合は、牝馬群は隊列の前方に、牝馬群は隊列の後方に配置させます。

1) 集団調教

馬は本能的に群れを形成したがる動物であることから、新規環境へ順応させるために、騎乗調教の初期段階では、誘導馬を先頭にある程度の距離を保った集団あるいは併走での調教を行い、馬を安心させます。

2) 縦列調教

調教段階が進むと縦列での調教を実施します(図2)。前の馬との距離は2馬身を目安とします。調教進度が進み、頭数が多い場合、3~4頭で区切って実施することもあります。また、馬に様々な経験をさせ、精神面を成長させるために、定期的に位置取りをローテーションします。縦列調教では、前の馬の後ろを自然と真直ぐ追走させるよう促し、前の馬のキックバックや後ろを走行する馬に慣らします。



図2 縦列調教

3) 併走調教

併走での調教(図3)は、馬同士を可能な限り寄せて、お互いに競い合わせることによって前進氣勢を喚起する目的で行います。また、馬の後ろで折り合いをつけ、推進力をためた走行を学ばせる目的もあります。このような目的による併走調教は、縦列調教において1ハロン18秒程度のステディキャンターで4ハロン程度の走行が可能となって初めて実施します。一方、馬混みに慣らす目的で、二列縦隊でゆっくりとしたキャンターで行うことも効果的です。二列縦隊では、前後左右

の馬の列を整え、競馬における馬群を想定して、馬群の中で我慢するためのエッセンスを抽出した隊列が可能となります。トレーニングセンターでは出走に向けて、決められた隊列からの追い抜きや割り込みなど、競馬を想定した調教が実施されますが、育成調教の段階では、二列縦隊の中で前進氣勢を温存しつつ、真直ぐ走ることを主眼において調教を実施することが効果的です。



図3 併走（二列縦隊）調教

ウォーミングアップとクーリングダウン

調教の前後には、必ず常歩でのウォーミングアップとクーリングダウンを実施します。さらに、ウォーミングアップの一環として、必ず速歩による歩様チェックを行い、歩様の異常の有無を確認します。ウォーミングアップやクーリングダウンの効果について少し触れておきます。

ウォーミングアップは準備運動のことであり、レースや調教では走能力の向上やスポーツ障害の防止のために行われます。競馬では出走馬が馬場に入場すると、「返し馬」が行われますが、これはまさにウォーミングアップに当たります。生理学的には体温（特に筋温）の上昇、すなわち筋の代謝活性の上昇、ヘモグロビンの酸素運搬能力の向上、呼吸抵抗低下による酸素摂取能向上、筋の粘性抵抗の低下による収縮・弛緩速度の向上、関節の柔軟性の増大および心理コントロールなどの効果が挙げられます。最近では、適度なウォーミングアップにより、レース中の乳酸産生に抑制効果があることが分かってきました。

クーリングダウンは、レースや調教など強めの運動後に行われる軽い運動のことを意味します。運動によって生じた疲労を速やかに回復させることを目的として行われます。生理学的には、リズムカルに筋肉の収縮・弛緩を繰り返す、静脈弁の働きを活発にして循環を良くすることによって乳酸等の疲労物質をより迅速に処理することです。ウォーミングアップでは徐々に運動強度を強めていくのに対して、クーリングダウンは徐々に運動強度を弱めていきます。その日の運動強度にもよりますが、最低20分間（可能であれば30分間）のクーリングダウンが必要です。一方、リラックスを目的とする場合には、必ずしもスピードの速い常歩は必要ありません。

ウォーキングマシンの活用

馬の運動は人が馬とコミュニケーションを取る機会であり、引き運動、調馬索運動あるいは騎乗運動を実施するのが理想といえます。しかし、時間あるいは労働力に制約がある場合には、必要な運動量を補うためにウォーキングマシンの活用が有効です（図4）。ウォーキングマシンは、スピードおよび時間を正確に調整することができ、規定運動が可能となる利点があります。さらに普及当初は問題となっていた安全面においても、ハード面が改良されたために、パドック放牧よりも安全性が高くなっています。一方で、機械による単調な運動であるため馬が飽きやすく、加えて馬を強制的に運動させるためアクシデントへの対応として人による監視が必要という問題も残されています。



図4 ウォーキングマシンによる運動

1. ウォーキングマシンの馴致

ウォーキングマシンの内部環境に馴らすために、数日間は引き馬でマシン内を歩きます。初めて馬をマシン内に放す際は、最初の1周は引き馬で回って落ち着かせます。また、馬が馴れるまでは立ち止まったり、出入り口から出ようとしたりする場合もあるので、ウォーキングマシンに馴れている馬を先導させることが推奨されます。ウォーキングマシンによる事故は初日に起こることが多いために、最初は十分な監視下で実施しなければなりません。

2. 効果的な利用方法

調教前にはウォーミングアップを実施しますが、馬体をほぐすために時間を要する馬などにウォーキングマシンを使用することによって、主運動をより効果的に行うことができます。また、調教後にはクーリングダウンが必要ですが、時間や労働力に制約がある場合には、ウォーキングマシンの利用も有効です。

3. 運動負荷時間と速度

ウォーキングマシンによる運動負荷時間は目的によって異なりますが、ウォーミングアップおよ

びクーリングダウンでの使用時には15～30分、休日の運動を目的とする場合には30～60分程度が目安となります。なお、JRA育成馬に対して実施している速度は6.0～6.5km/hです。毎日異なる手前での実施が推奨されます。また、運動中の状態をよく観察するとともに、規定した運動時間を超過しないように注意しましょう。

ゲート馴致

一般に馬は警戒心が強い動物であると考えられ、新奇な物や初めて経験することに敏感に反応しがちです。また、閉じ込められる様な閉鎖空間や束縛される環境に対しては、恐怖や警戒心から逃避しようとしみます。そのために、馬の全ての馴致過程において言えることですが、焦らずに馬が理解するまで根気よく馴らす必要があります。

1. ゲートに対する馴致

1) ゲートの通過

ゲート馴致は騎乗馴致と併行して開始しますが、まずはゲートが安心できる場所であることを馬に学習させるためにも、ゲートは日常の運動中に身近に見える場所に設置します。引き馬やドライビングの段階において十分ゲートを通過させ、可能な限りゲートに対する恐怖心を除去するようにします。次に騎乗して幅の広い練習用ゲートを通過させます。ゲート通過が可能になれば、毎日の調教時に通過し(図5)ゲート通過に馴らします。徐々に競馬で使用するのと同じ幅のゲート通過に馴らしていきます。



図5 初期調教時における幅の広いゲートの通過

2) ゲートでの駐立と扉の閉鎖

ゲート通過に馴れた後に、ゲートの扉を開いた状態で駐立を行います。それができたら、前扉が開いた状態で駐立させ、後躯を十分にパッティングしてから後ろ扉を閉めます。この時に馬が落ち着いているようであれば、騎乗者の扶助で少し後退させて、後ろ扉に臀部が触れることを経験させます。この場合には、馬が前に突進する可能性があるので注意して行います。最後に手で前扉を閉

めて最終的なゲート内での駐立を習得させます。前扉を閉鎖しゲートに入り、さらに後ろ扉も閉鎖しても馬がリラックスして静かに駐立することが達成できれば、声をかけて愛撫します。なお、牝馬など怖がりな馬には青草やペレットなどを与え、安心させることは効果的です。また、横に慣れた馬を立たせたり、人を扉の前に配置したりして、馬を安心させることも効果的です。

2. 発進馴致

馬がゲート内での駐立および扉の閉鎖に馴れたら、次は前扉が開いたら騎乗者の扶助により常歩で発進することを教えます。最初は前扉を静かに手で開けて、保持者とともにゆっくり枠外に常歩で出ます。この時に馬が興奮しないで落ち着いて行動できれば、次の段階では機械的に前扉を開ける馴致を行います。育成牧場ではゲートの前扉が開くとともに、常歩でスムーズに出ることができれば十分であり、ここまでの馴致が育成牧場の役割となります。

3. ゲート馴致の目標

一度、馬にゲートに対する恐怖心を植え付けると、その経験を良く記憶しており、その除去は容易ではありません。そのために、ゲート馴致は細心の注意を払いながら、慌てず、そして焦らず行いましょう。育成牧場でのゲート馴致の目標は、数週間の間隔を開けて、以下の内容を2回スムーズに達成できることです。

- ・ 騎乗した状態で前扉を閉めたゲートに入る（馬を引っぱって入れても構わない）
- ・ 後ろ扉を閉める。
- ・ ゲート内でおとなしく 10 秒程度駐立できる。
- ・ 前扉を開け、騎乗者の扶助により常歩で前方に出られる。

最後に

馴致の際には、人が求める指示を馬が拒んだり、またイメージ通りに進まないことも少なくありません。このような場合には、人が馬の行動を冷静に観察することによってその原因を見出し、解決へと導く必要があります。そのために、以下の4つのビジョンを持って馴致を行うように心掛けなければなりません。

馬に対してその将来を期待すること 馬に求める目標を明瞭かつ具体的にイメージすること その時点における馬の状態・能力を確実に把握・理解すること 段階を踏みながら安全かつ無事に目標に導くこと
--

今回、記載した騎乗馴致については、2009年12月に発刊した「JRA 育成牧場管理指針」 - 日常管理と馴致（第3版） - に部分的に記載されています。この冊子の必要な方は JRA 馬事部生産育成対策室までお問い合わせください。なお、（JRA ホームページの「JRA 育成馬サイト」

（<http://jra.jp/training/>）でもご覧になれます。

BTC ニュース 78 号から約 2 年余り掲載してきました「やさしい育成技術 - 子馬の管理方法」ですが、このシリーズでは主に生後間もない子馬の段階から育成馴致までについて必要と思われる

ことを中心に解説してきました。皆様少しはご活用していただけたでしょうか？これで一区切りとなりますが、これからも機会を捉えて誌面でお目にかかりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。